

資料編

ヒアリング調査記録

ヒアリング① 岩井公子氏（京都府合唱連盟理事，京都少年少女合唱連盟役員）

140725 (FRI)

京都会館とともに歩んだ京都合唱祭

- ・ 関西合唱連盟は、戦前 1927(昭和 2)年からスタートしていて、京都府の合唱もその中で活動していた。戦後、関西各府県の合唱連盟はほぼ同時に各府県単位で連盟を作ったが、それが 6 府県とも 1963(昭和 38)年頃のことになる。すでに 1948(昭和 23)年に全日本合唱連盟ができていて、その中に関西合唱連盟など地方のまとまりが支部として組み込まれ、今は全国に 9 支部ある。1963(昭和 38)年に京都府合唱連盟ができて、翌 64 年に第 1 回の「京都合唱祭」が始まり、今年が第 51 回を数えるという長い歴史がある。第 1 回、第 2 回は本願寺会館で、第 3 回から京都会館を使うようになり、それ以来ずっと改修工事が行われるまで京都会館で開催してきた。去年は第 50 回の記念大会だった。
- ・ 関西の合唱界をリードしてこられた日下部吉彦先生(音楽評論家，元朝日放送解説委員)は、私の同志社 C C D (Collegiate Choral Doshisha 同志社学生混声合唱団)の先輩で、学生時代によく教えに来られた。合唱はもちろん、クラシック畑，ポピュラー畑，フォーク畑で、同志社はたくさんのプレイヤーを輩出している。学生時代の趣味が高じて、卒業後プロになっている人も多い。
- ・ 私の学生時代、京都にはいいホールがなく、大阪のフェスティバルホールでよく演奏をした。憧れのフェスティバルに出られるのは学生として嬉しかった。京都会館の柿落し(1960 年)の「第九」を在学中に歌い、京都会館創立 50 周年の第九には京響市民合唱団の団員として出た。50 年歌い続けてこられたのは有難いことで、もし長く歌っていて歌がうまくなれるとすれば、今ごろどんなにうまくなっていたことだろうと笑い話にしている。

岡崎は抜群の音楽環境

- ・ 京都会館は、あとで「音が悪い」とか言う人も出てきたが、出来た当初はとにかく感激した。それまで京都には大きな公共ホールがなかったから、皆で喜んだものだ。今でこそコンサートホールやびわ湖ホールなど良いホールができ、そのホールを使うことも多いが、京都会館は開館当初からずっとお世話になっているし、愛着がある。府の合唱連盟に属する約 130 団体のおよそ 3, 4 千人の人が集まって合唱を通じて交流を深め、第 1・第 2 ホール同時進行で歌三昧の催しにできた。そういうホールは他にはない。岡崎公園は外で合唱練習をしても文句は出ないし、抜群の音楽環境にある。公園全体を歌で埋め尽くすこともできる。平安神宮や美術館に来た人へのお知らせにもなり、時間があれば合唱祭に聴きに来てもらえるという利点もある。
- ・ 1995(平成 7)年に京都コンサートホールが出来た時に、いい音のホールを一度体験してみようということで、合唱祭を行ったが、130 団体 3, 4 千人の催しとしては楽屋が少ないなど運営がしにくかった。また、民家が近いから外での練習もできなかった。然し反面、コンサートホールの音のいい響きをみんなが体験できたことは良かった。

- ・その点、京都会館は第1・2ホールほかすべての施設を借り切ると会議室とかが楽屋に使えるというメリットがある。50年も使っていると使い勝手がいい。京都合唱祭は、毎年各団の演奏だけでなく、いろんなセミナーやワークショップで勉強もできるという総合的な催しというのが特長だ。ホールで演奏をしている間に会議室でワークショップをしたり、学生指揮者講習とか難易度の高い楽曲のセミナーを行ったりした。現在は京都会館が改修中なので来年まで八幡市文化センターで行っているが、京都会館の両ホール使用のようには行かない。

北部や南部の合唱仲間と共に

- ・ここ数年、京都合唱祭は、それぞれの団が歌ってお互いに聴きあうというだけでなく、合同の曲をみんなで歌うというプログラムを加えてきた。「京・歌い春(今日、歌いはる)」と題する、京都にちなんだ誰でも歌える曲を編曲して楽譜を作り、自分たちの曲を歌うのに加えて、いくつかの団と一緒にその中から選んだ曲を歌うという趣向にした。一般的な、それぞれが単独で歌うだけの合唱祭にはしたくないという気持ちでそんな企画が行われた。京都合唱祭は「聴きに行く値打ちがある」という評価を得ている。全日本おおかあさんコーラス関西支部京都大会を兼ねているので、ここで優勝した団は全国大会に出場する。連盟と共に朝日新聞社が全面的に主催、キューピー協賛をいただいて今日まで歩んでいる。
- ・去年は50回記念大会だったので4日間の開催であった。駅の大階段で観光客等を交えて歌うという催しや、府北部の綾部までバスを連ねて出かけ、北部の方々と一緒に合唱祭を行った。30周年の時はJRの合唱列車を走らせた。40回の時もやはりバスで行ったが、50回の時ほど大掛かりではなかった。北部の人は京都市内まで来るのは大変なので、時にはこちらから出かけようとなったものだ。今年は南部の山城地域の加盟していない団体にも出演してもらったり、一緒に歌ったり交流したりした。北部南部それぞれの仲間と一緒に歩んでいきたいと願っている。

お互いを認め合い合唱を盛り上げる

- ・私も合唱団の指揮をしているが、指揮者が指揮者ゆえに、合唱団という名前を付けて良いのかなと思う演奏をしているかもしれない。しかし周りの方は皆温かく応援してくださる。合唱をやっている人は上手になれば一緒に喜んであげ、ヘタだったら「もっと頑張りや」と言ってくくださる方ばかりだ。
- ・指揮者は全て芸術大学の卒業生ばかりではない。色々な方法で指揮者になられ、その先生の元々の潜在的なお力で、いくつもの合唱団をトップレベルにされた先生方も多い。指揮者の考えによって合唱団として目指すもの、唱法とか選曲とか全然違うものになる。130団体あれば130通り、それぞれの味がある。金子みすずの言葉ではないけれど、みんな違ってみんな良いのである。

- ・府の合唱連盟には加盟せずに活動している団体も多く、加盟 130 団体というのはほんの一部にすぎない。その何倍もの合唱団があるのではないだろうか。加盟団体は、連盟に入れば仲間と一緒に何かできるという期待から加盟しているところが多いと思う。みんなそれぞれを認め合い、仲良く、みんなで合唱を盛り上げようという団体ばかりである。高校や大学なども合唱が好きで指導の上手な先生が赴任して、合唱部の顧問になってそれが伝統になり、引き継がれていく。京都合唱祭もそうだが、そういう名を馳せた高校や大学のサークルの発表会には全国から音楽の先生などが聴きに來られる。京都の合唱活動の歴史にはそういう積み重ねがある。

合唱でコミュニティを活性化する動き

- ・京都で国民文化祭があったとき(2011(平成 23)年)、知事さんも市長さんも合唱の祭典に來られた。京都は府と市が仲良くまとまっていて、支え合っている。
- ・京都には少年少女合唱連盟もあり、国際児童年の 1979(昭和 54)年に設立され、翌年の子どもの日に第 1 回合唱祭が開催された。今年で 35 回目を迎える。今年には 16 団体 703 名が歌い交流する。初めは京都会館でやっていたが、コンサートホールでの開催要望が強くて、ここ数年、コンサートホールでやっている。子どもの合唱団で普通はコンサートホールで単独で歌うことなど考えられないが、合唱祭なら小さな合唱団でも歌うことができるので、年 1 回の楽しい行事である。
- ・今あちこちで「童謡コーラス」(※)が盛んになっている。例えば伏見区なら呉竹文化センターでも、私の地元の久我の、生涯学習プラザでもやっている。「コーラス」と称するが、昔からなじみのある童謡や唱歌を斉唱、ユニゾンで、楽譜などなしで誰でも歌える歌を歌う試みだと聞いている。とにかくそこに行けば声が出せて楽しいらしい。音楽を手段にしてコミュニティを活性化する動きと言えるが、活動の輪が全国に広がっていると聞いた。これもよいことである。

(※NPO法人日本音楽生涯学習振興協会が、結成、運営支援する。京都府下では 17 グループが登録されているが、関西だけでも数百に及ぶ(2014 年 8 月現在)。)

合唱を通じて世界と関わる

- ・大きな催しとして思い出すのは、2005(平成 17)年 7~8 月に国立京都国際会館と京都コンサートホールを中心に開催された「第 7 回世界合唱シンポジウム」である。アジアで初めての開催であり、参加国 49 カ国、参加者 6,063 名、招待合唱団 31、コミュニティコンサート 15 会場、サテライトコンサート等々、きわめて大規模な催しで、数多くの交流があった。私はコミュニティコンサートの担当として、会場確保や参加団体の選出など、いろいろ携わったが、今となってはいい思い出となっている。
- ・今年 8 月に中東の「YMCA エルサレム・ユース・コーラス」の第 1 回交流コンサートを京都コンサートホールで行う。イスラエルとパレスチナの高校生が同じ混声合唱団のメンバーとして活動している世界でただ一つの合唱団で、東京と京都で開催され、京都でも

高校生と交流する。難しい環境の中で一緒に合唱で「平和」を歌おうという試みだ。たまたま久我の杜少年少女合唱団も出場の間が与えられた。保護者も趣旨を理解して「ゼヒエールを贈ろう」と乗り気になってもらえ、喜んでいる。このイベントには知事さんも市長さんもメッセージをくださるそうだが、こういうことが合唱の根源だと思う。そして、行政にはこうした意義あるイベントをもっとPRしてほしい。

- 京都は、東日本大震災のあった年の6月にも被災高校生たちを受け入れて一緒に合唱祭を行った実績がある。被災地で合唱をやっている人たちが、歌う場所を失い気力も失せていた時に、京都に呼んで歌わせてあげたらどうかと考え、すぐに向こうの連盟に連絡して実現した。あの時は200名ほどの高校生が京都へ来てくれ、復興への元気をたくわえてもらえたと思う。
- 他府県では合唱祭参加費として出る団体から徴収していることが多いが、京都合唱祭ではずっと以前から、お客様には合唱を楽しんでもらい自分たちは精一杯歌うために、参加費をとるのではなく、お客さんにチケットを買ってもらおうという方法をとっている。参加者は1人4枚のチケットを受け持ち、お客様の動員に努力する。チケットは3日間とか4日間かの合唱祭の通し券で、ここ数年は1枚800円。それに中高生の団員を育てるための助成金にするプラス10円。1枚で何回でも来てもらえる。コンサートホールができた時にレンタル代にでもしてもらおうとプラス基金分10円を乗せして以来の慣例になっていて、今はそれが若手団員の育成基金になっている。4人分の席を皆で埋め、たくさんのお客様の前で演奏しようと約束になっている。
- 府や市に後援していただいている合唱祭、その信頼の上に私たちがやっていることを公的に認めてもらっていることになり、それは大事なことだと思う。余裕があればお金をいただくに越したことはないが、今のご時世では無理なのだろう。

まだ高い練習場の施設使用料

- 合唱をするには練習場が必要である。団にとって安い会場確保は大切な事項だ。昔は学校の空き教室を貸してもらえることが多かったが、最近は、統合されたりして沢山の教室が空いているであろうに、管理や治安の問題からであろうか、なかなか貸してもらえない。学校はピアノがありトイレが使えるとか便利なので、貸し出してほしいと思っている。夜でも真っ暗な教室より灯りのついた教室の方が良いと思うのだが。使う方も必ず責任を持って使うから、許可するほうもできるだけ寛容になってほしい。
- 学校以外の市などの公的施設も割安に貸し出してほしい。

求めるさまざまな支援

- 民間企業でも、以前、ある信用金庫は、小さなホールや会議室を地域の人に貸したりしていて、私もその恩恵に浴したことがある。借りたからと言って銀行口座を作るとかの約束はなかった。とにかく人が始終出入りしてもらえるだけで有難いと…。それも今で

はなかなか実施されない。

- 京都合唱祭では、キューピー株式会社にはお金を出していただいている上に、参加者に毎年まだ店頭に出していない新製品をいただいている。みんなの頭には合唱祭に出ればキューピーの製品がいただけるとインプットされているし、スーパーに行った時には同じものを買ってしまうようになっている。いろいろな企業がそんなふうにしていただけると有難い。お金が壁になるのではなく、さまざまな支援の仕方があるはずで、支援する方にも喜んでいただけることができればいいと思う。

ロームシアター

- 京都会館は新しいロームシアター京都として生まれ変わるが、現代の建築技術が活かされ、さぞかし素晴らしいホールになると思う。私は柿落しで歌って以来、京都合唱祭、京都こども合唱祭など何度京都会館の舞台に立ったことか…。新しいロームシアターも、私のような一市民に愛され大切に思われる会館になってほしい。そのためには使用料なども庶民が利用できる程度に抑えてほしいと思っている。

世界を構成する「音」に着目する

- ・初めに基本的な認識として「音」の世界について言うと、美しい音楽や相手とコミュニケーションを図ろうとする人の声も主役ではあるが、それ以外の音も存在している。例えば、その「背景」にある車が走る音とか、こういう喫茶店なら店員さんが食器を洗っている音とか、ほんのり流れるBGMとか、そういう主役となる音以外の音も存在していて、それらを含めて「音の世界」「音環境」であるという認識が大事だと思う。その中で人は注意を向けたい音にだけ意識を向け、コンサートホールなら聴きたい音楽に耳を傾ける。日常生活の中では、聴きたい音にだけ意識を向けるというのは人間の生理だが、背景にある音も含めて音の世界は成り立っているということに着目する必要があると思う。
- ・7年ほど前に京都タワーの展望室のリニューアルに合わせ、音環境のデザインを考えるという実験を行った時に3つの柱を考えた。1つは、嫌な、不要な音をなくす「マイナスの音デザイン」の段階がある。不快に感じる騒音とかを減らすという方向だ。次は「ハコの音デザイン」で、室内環境に音がある場合は建物の内装によって音が変化する。例えば、お風呂場と絨毯を敷いた部屋では音がまったく違うように、声や音の響きは建物の材質によって異なる。それを考えるために、京都タワーの場合は床がPタイルのようなカツカツした固い材質で室内に足音がたくさん反響するので、そこをカーペットに変え、足音の響きを抑えようとした。それは「ハコの音デザイン」になる。
- ・最後は「プラスの音デザイン」で、周りの環境がニュートラル（静かで違和感の少ない状態）になったら、そこに音楽を入れるとか音を足していくという方向性がある。これら3つがうまく調和した状態が実現すれば、さまざまな公共空間の環境全体の質が底上げされるだろう。今はたぶん3つ目の「プラスの音デザイン」ばかりが考えられていて、一般に音を出す前の環境についてはあまり意識が向いていないと思う。それは、東京であろうと京都であろうと、商業空間であろうと駅やホームの空間であろうと変わらない。

地域の宝探し「音」版の試み

- ・それが前提で、次に背景の音をどう扱うかという話になる。今日、さまざまな水音の録音にピアノ曲を重ねた作品を資料として持参したが、背景の音として水音を取り上げた。京都に造詣の深い人なら京都は「水の都」と言うかも知れないが、同じ水音でも鴨川と下鴨神社・糺の森のせせらぎとまた別の地域の川ではまったく違う。鴨川だけでも、上流の雲ヶ畑志明院の音は石や砂が川の中にあつてうねりのある心地よい音だが、丸太町の橋の下では護岸工事もなされ、かなり川床も敷き詰められているので「ザー」という機械に近い音がする。同じ鴨川でも上流と下流ではぜんぜん違う。その背景の音も沿岸地域ごとに多様な世界がある。京都御所の出水の小川は地下の水を汲み上げているが、その水音は「コロコロ」した心地よい音だ。1つの水音でもさまざまな広がりがあることを実感する。それらを録音してきた音に合わせて私がピアノ曲を14曲作曲して作品に仕上げた。

- 京都にある音の世界は背景も含めて多様性があるのだが、ふだんの私たちが主に聴くのは人の声であったり、BGMでも音楽として、「情報」の音として聴く耳になってしまっている。人の耳が悪いとか関心がないことが悪いというのではなくて、聴覚は聴きたい音にチャンネルを向ける特性をもっている。たくさんの音という情報の渦に巻き込まれないよう、不必要な音を抑え、聴くべき音をうまく選択しているわけだ。
- 昨年のこのプロジェクトの提言に「音楽コミュニティの創造」があるが、普通に考えるコミュニティという地域共同体レベルで普段聴いている音環境は、今の京都の都心には町家もあるけれども大型マンションや駐車場が占め新しい音が入ってきて、もともとあった町なかの音が変わりつつある。本来町の音として共有されるべきなのに、みんな好きな音を出したり密閉されたマンションには外の音が入って来なかったりというのが現状で、例えば、時刻を知らせるお寺の鐘の音とか、音によるコミュニティ形成というのはほとんどなくなっている。
- 市内のお寺の鐘を調査したところ、10年前だと市内の400カ所弱くらいの寺から聞こえていたのが、今は180~200カ所くらいに激減している。烏丸六角の六角堂の鐘は、昔はそばの花屋さんがついていたのが、2年ほど前から機械化して自動で鳴らしている。その周りもマンションや高いビルになって鐘の音を聴く人も少なくなった。このようにもともとあった音が聴けなくなっている。ケータイ電話や小型音楽再生機器などのパーソナル・メディアの音とか、刺激の強い音や情報性の高い音が新しくどんどん入って来て音の世界が変化している。
- ただ京都はコミュニティが強く、今でも地蔵盆とか学区運動会とかがしっかり根付いているので、それに関連する音は他の地域に比べるとたくさん聞くことができる。だから、もしコミュニティの音を残していこうということになると、例えば地蔵盆を残そうという力のように、その可能性は強いと思う。それがコミュニティの音の共有が希薄になりつつある状態を食い止められればいい。
- 水音のように、「京都は自然の音がいい」とかいう人はたぶん部外者というか、外から来た人で、もともと町なかに住む人はそういう音に注意を向ける機会が少なくなり、温度差がある。「音楽コミュニティの創造を」と言ってもわかる人にはわかるが、住んでいる人の中で認識する人は少ないかも知れない。1つ提案できるとすれば、今の地蔵盆とかの地域行事の中に「町の音を聴こう、発掘しよう」「思い出の音を共有しよう」といった、地域の宝探しの「音」版のようなプロジェクトを仕掛けていくことが考えられる。家から音の出る物を持ってきて鳴らしてみようとか…、そういうちょっとした試みがあれば1歩前進できる。いきなり「音楽コミュニティをつくる」と言うより、先に遊び心で音の共有から始める仕組みがあったほうが後々発展していくのではないか。

無意識まで踏み込んだ音環境のデザイン

- 「六感で感じる観光」という提言で思いついたのが、それは心の無意識の領域のことだ。

人が聴きたい音にだけチャンネルが向くのは「意識」の状態だ。知覚の構造は3つあって、一番上が「意識」、真ん中が「前意識」というバッファゾーンがあり、その下に「無意識」という、普段の精神状態では達し得ない領域がある。よく言われるのが、ざわついた中にも自分の名前を遠くから呼ばれるとなぜか自分には聞こえてそちらの方向を向いてしまうという「カクテルパーティ効果」だ。パーティのようなざわついた環境の中でも注意すべき音には人は反応してしまう。それが「前意識」というグレーゾーンで、音の情報が常に入力されていることの実事であるが、普段は表に出てこない。その分量が8割くらいあって、「意識」に届いている音の世界は2割くらいと言われる。たくさん音の音をすべて認識すると人間はパンクしてしまうので、それを自動的にふるいにかけているわけだ。

- だから「前意識」か「無意識」で聴いて蓄積されている音はすごく多い。それが大事で、それが背景の音になる。「第六感」の話はそれに近いと思う。潜在的に溶け込んでしまっているような音環境をつくるためには、前意識で処理されている音の世界をうまくデザインする必要がある。この喫茶店の空間も壁や周りが石でできていて、お客さんの声が響いてうるさく感じるから、誰かとコミュニケーションを取る時には、お互い無意識に声の大きさを大きくして相手に伝えようとする。それは騒音・雑音を前意識で聴いて無意識に声を大きくするという自動的に処理された状態なのだと思う。水音とか木の葉の擦れ合う音とか無意識で感じる音に注目し、そこも入れてデザインすることで前意識にも訴えていく音環境が作れる可能性がある。今の音環境の設計は、意識された音中心で前意識の音まで踏み込んでいないから、本当の音環境のデザインにはなっていない。
- 京都市は、今、景観条例の施行段階で看板や広告の奇抜な色やデジタルサイネージとかを禁止するなど、きめ細かくやろうとしている。景観としてはさらに良くなるという方向なのだが、それだけでは十分ではない。もともとあるものに対する市民の気づきを喚起すると言うか、受け手の知覚を刺激するという意味で教育的な施策の方向性が必要である。しかし、景観条例を読んでみると、そうした方向性はなく、当然ながら視覚中心だ。色、高さ、面積、容積率とか…。そこに場の良さが積極的に知覚されるような「気配」のようなものを入れ込むのはなかなか難しいのかも知れない。

景観条例に「感覚環境」を加える

- 例えば、浜松市には「音・かおり・光環境創造条例」という条例があり(平成16年制定)、音と香りと光という複合環境を創造していこうとしている。また4年ほど前、環境省に呼ばれて自分が委員をしたのが「感覚環境のまちづくり」というプロジェクトだ。「感覚環境」とは具体的には視覚と味覚以外の聴覚・嗅覚・触覚の3つで、音と香りと触覚になる。視覚はもうやっているし、味覚はもう確立されている。プロジェクトの落としどころは「マイスター」という、まちづくりをやっている人にファシリテーターとして教育できる人材を育てるということだった。そこでは好きなことを言い合って、話はまとまらずに終わってしまい残念だったが、要はそこでも教育の重要性についての話に行き着いた。

- ・音環境を研究している研究者は日本には少なく、サウンドデザイナーと言うとコンサートホールを作るとかスピーカーを配置するとかいう仕事になる。昔に比べてBGMもさまざまな工夫がされるようになってきたが、まだ「プラスの音」に止まっている。それを活かすためには「ハコの音」と「マイナスの音」のデザインをやって全体を調和させることが不可欠だ。ただし、車の音とか人の出入りの音とか空調の音とか、どうしてもマイナスのデザインができないものもある。京都タワーの実験では空調をなくそうとしてできなかったの、音楽的な要素を入れて枠組み効果というか、不快感を減らす環境音楽の制作を試みた。音楽はいろんな「枠」を作ってしまう怖いメディアなのだが、うまく作っていくと、生理的に嫌と感じてしまう音も減衰させることができる。なかなかできるミュージシャンはいないのだが、自分はそれが出来る技術を持っていると思う。こういう空間でも莫大なお金をかけずに、音源さえ作れば不快感を50%か60%は減らすことができる。
- ・公共施設では、景観条例にあるように、やはり目で見えるものがわかりやすく、後で追検証もしやすい。そこに「感覚環境」も加える取組みを実験的にやっていたのではないか。より音や音楽に対して敏感になれる質の高い空間ができる。京都ほどのブランド都市ならやる価値はあるのではないか。今の景観条例に音的な要素をいれたら、京都市が掲げている「品格形成のまちづくり」にダイレクトにつながると確信している。
- ・今の景観の関連法や条例に、具体的に音を入れたらどうなるかを見たことはあるが、なかなかうまく入らない。既成のものとは違うからプラスするというのではなく、全く違う発想で入れるとか作らないといけないと思った。そうした価値観を共有するための人づくりと組織づくりが重要だ。
- ・町なかではさまざまな音の要素が多様性がありすぎて音の空間形成は難しいかも知れないが、例えば岡崎とか下鴨とか、特定の良好な場所に絞って空間の質を高めるような音の条例を組み入れるということは可能かも知れない。いろいろな音の種類を保つという多様性を重視すれば、必ず空間の質は高くなる。例えば、自然環境では鳴き声を聞かせてくれるいろんな鳥が来やすいように、それぞれの鳥が好む木を植えるとか、具体的に考えていくと、景観条例に音の要素を落とし込む方向性が見えてくると思う。

「京都の音」発見プロジェクト

- ・全国のいろんなまちづくりに携わっている方にアドバイスすることがある。その時はなるほど分かってもらって、それぞれの場所で努力はされているのだろうが、なかなか持続性がないように見える。音は目に見えないし、聴覚は視覚より知覚の印象が人によって違うから、理解されにくい。そういう曖昧なものであるからこそ形にしていけないと消えてなくなる。形にして持続していく必要があるのだが、継続的にやっている自治体はなかなかない。環境省のプロジェクトでさえ私は1年間の委員参加のみで、その後は立ち消えになってしまった。京都では、ぜひそうした総合的な環境のランドデザイン

ンと仕組みをぜひ作ってほしい。その意味で、以前京都市の 100 人委員会のメンバーから入ってほしいと言われたことがある。音環境というテーマを取り入れようと試みられたものの、共感力と持続性が希薄だったので、それっきりになったのではないと思う。

- 市民がいろいろな音や音楽に気づくことのできる「京都の音の発見」のようなプロジェクトが実現できれば面白い。平安時代に平安京の内部に配置された寺院の半鐘、梵鐘は、五行思想に基づく音のアイコンになっていて、それに基づいて 5 つほどの地域ごとの音が意図的に配置されたという学説がある。平安時代から近世初期にかけての各梵鐘の音の高さを 12 体測定すると、だいたい三分の一の割合で、朱雀大路を中心に東西南北の 4 エリアごとに同じ周波数（音の高さ）になっていたという学説である（中川真『平安京 音の宇宙』平凡社、2004 年）。それをすべて信用するわけではないが、車の騒音が存在する現代の音環境とは全然違う姿を想像することができる。平安時代は各地域からそれぞれの場所で同じ音の高さの梵鐘の音が聞こえてきたと想像できる。現代社会でそうした音の姿を実感することは困難だが、例えば一日のある時間帯にだけ、車を使わず人の活動も自粛して、まちの背景音を積極的に聴くというイベントをしたら面白いと思う。タイトルをつけるのであれば、「サイレントデー」とも言えるだろう。まち全体を静かにして鐘の音に耳を傾けるイベント、そういう時間があつたら面白いと思う。
- そこから平安時代のまちづくりが今の音環境に参考になる知恵が発見できるのではないか。併せてまちづくりとして音から何ができるかという問いかけをお互いにするようなイベントがあればいい。1 つの音楽ホールとか「点」としてやるのではなく、まち全体でやる。祇園祭のように車を通さないといった難しいところはあるが、1 時間だけでいいから静かにしてもらってみんなで音を聴く。例えば毎年 8 月 16 日の五山の送り火の時、町じゅう暗くして息をひそめて点火を待つように、少しの間ではあるが「コミュニティ」が形成される。送り火に合わせて町じゅう静かにし音を意識してもらっただけでも、市民は音の重要性を再認識するかも知れない。

京都「残したい音」「残したくない音」100 選

- 1996 年に「残したい日本の音 100 選」を環境庁が選定した。京都府では嵯峨の竹林(京都市)、るり溪(の川の流れ)(南丹市)、琴引浜の鳴き砂(京丹後市)の 3 つが選定されている。日本全国万遍なくだから 1 つの府県は 3 つか 4 つの割当てになる。京都市内は竹林 1 つだけ。「残したい音風景」「残したくない音風景」を京都市内でやれば面白い。音は人のさまざまな感情を与えつつ聴こえるから 2 つの面でやる。いいものだけだと上澄みだけになって多様性がなくなる。選定のために、区ごとに細かく挙げていく。多様性が大事だ。実際選定されたら、聴きに行くイベントやグループができれば面白い。継続もされる。
- 1990 年代半ばに環境音楽とかが流行った。マリー・シェーファーが来日したのは 1995 年になる。それから全国的に下火になり、一方で BGM とかは有線放送等の会社が著作権もクリアしながら商売にしていた。それ自体悪いことではないが、その「次」、人の聴

覚に合った質の高い音づくりの方向性がない。レディメイドの曲や音を流すのではなく、もっとオーダーメイドで曲を作る必要があるということだ。京都タワーとかマンガミュージアムでは私の曲が流れているし、今プラネタリウムの作曲をしている。例えば岡崎という地区全体の環境音楽があっても面白い。

- 公共施設でも美術館、博物館とかはBGMは流れていない。現状では、BGMという聴覚情報が視覚情報に悪影響を与えやすいからその利用は控えられてる。視聴覚には相互作用がある。逆にBGMを積極的に使っている表現が映画音楽。平板で単調な画面であっても音楽でいろんなイメージーションを膨らませることができる。映画はそういう効果があっ
ていいのだが、美術館だと音楽が視覚を規定してしまうから流さないのが普通になって
いる。
- 今の日常生活の中で目立って聞くことのできる音の上澄みを編集して…という新しい表
現活動が出ているが、歴史的な根っ子とか地金とかそのあたりの気づきがないと、
既成概念の強い限られた情報によってうまく表現を作ったとしても脆いような気がする。
究極は「感性を磨く」という所に行き着くのだろうが、例えば音のワークショップか何
かの方法で気づきと面白さを共有した上で、そこから次の段階に進む必要がある。京都
市民が音環境の質の高さにあらためて気づき直すきっかけがあれば、京都というまちの
もつ都市の品格を再認識することにもつながる。京都市民は潜在的に良質の音環境の中
で生活を育んでいる。そのことが間接的に京都の高度な音文化や質の高い芸術表現にも
つながっているという文化度の高い評価につながればいい。

大和郡山のまちづくりから

- ・同志社大学に勤務していた平成の初め頃，私は奈良に住んでいた。奈良は金春流や観世流の発祥の地ということもあり，大和郡山城跡に「第二国立能楽堂」を建てるという構想づくりのお手伝いをしたことがある。単に箱モノを作るだけではダメで，能楽を含む日本の伝統芸能や斬新なスタイルの舞台芸術に至るまでの幅広い内容を含む世界的な舞台芸術フェスティバルを開催してはどうかということに合わせて提案した。国，県の事務レベル，城跡地権者等との話し合いは比較的スムーズに進んだ。奈良に夜の観光客を呼び込み，宿泊客と支出単価を増やして観光消費額を上げたい近鉄も，話が決まれば相応の金銭的支援をすることのできることであった。フェスティバルは，土，日，祝日の子どもや親子を対象にしたプログラム以外は基本的に夜間開催とし，初日と最終日は薪能とし，奈良の春日若宮おん祭の神幸の儀と還幸の儀に倣い，初日は大和郡山城天守閣跡広場における篝火点火に始まり，最終日は篝火消火の儀式で終わることも合わせて提案した。この構想は，政治的問題もあり最終的に実現しなかったが，私がまちづくりに関心を持つ大きなきっかけになった。
- ・それ以降も，北海道の帯広市等，まちづくりについて考える機会が結構あったので，「音楽とまちづくり」を含めまちづくりについては現在に至るまで関心を持ち続けている。専門の法律との関係からすると，余技ないし道楽と思われがちだが，法律は人の行為を基本に据え，人のあらゆる営みを知っていなければ適切な判断がしにくいという側面があるところから，すべての事柄に関心と興味を持ち，時間の許す限り調べ体験してきた。このことは私が法律家になると決めたときからの信念だ。初期には，ある種「点」であったものが，年とともに「点」が「線」になり，ようやく「線」が「面」になってきたかもしれないというのが現在の状況だ。今日申し上げる提案は，私が接してきた世界のいろいろな文化芸術のプログラムを京都に応用してみてもどうかという発想から考えた比較的具体性のある提案だと思う。

「音楽プロムナード」構想のきっかけと概要

- ・1つは，京都のまちなかに音楽をベースとした「プロムナード」をつくれないかということだ。それぞれの場所の性質に応じて最も効果的な音楽をそこに組み込むのが構想の基本だ。場所は文字通りプロムナードにふさわしい道だったり，公園・広場だったり，コンサートホールや新しくリニューアルされるロームシアター京都であったりする。要は，どこでも候補施設になり得るということだ。音楽がまちを生かし，まちが音楽を生かす，その相乗効果を生むソフトをどのように構築するかが大切だ。その発想は，ロンドンのロイヤルアルバートホールを拠点にした「プロムス」という大音楽祭に拠っている。「プロムス」はプロムナードコンサートの略で，8週間にわたるクラシック音楽を中心とし

つつ気軽に音楽と接することをモットーとする音楽の祭典で、地元の人とともに世界中から聴衆が集まる。クラシックだけでなくポピュラーも民謡もそこでは演奏され、観客はかしこまって音楽を聴くのではなく、奏者・聴衆共、気軽に音楽を楽しむ。クラシック音楽をかしこまって聞くようになってからの歴史は浅く、ときには先祖返りさせることも必要だ。イギリスでは最も良い季節である夏の8月を中心に7月中旬から9月中旬までの約2カ月開かれるが、京都の場合は夏暑く冬寒いので、気候の良い春と秋に開催する。「京都のプロムナード・春」は4月～5月、「京都のプロムナード・秋」は10月～11月、秋は今もフェスティバルがあるのでそれを発展的に解消し、その受け皿として音のプロムナード「音楽プロムナード」構想を位置づけてもよい。

- 構想の基本は、京都ではそぞろ歩きにふさわしい季節にプロムナードを散歩をすれば、自然に音楽が聴ける状況をつくり出すというものだ。ヨーロッパの音楽都市と言われるいくつかの街に行けば、まちの中心にある歩行者天国などでは、どこからともなく音楽が聞こえてくる。歩みに応じて音が変化し、ピアノの音を聴きながら歩くと、その音が小さくなるにつれてバイオリンの音が徐々に大きく聴こえてくる。ときには、建物の中から驚くほど高水準の合唱やパイプオルガンの音が聞こえてくることもある。その繰り返しが楽しめる…というのが私の音のプロムナードのイメージだ。
- これであれば何も施設はいらない。既存の神社や仏閣などの施設、また、広場や道も「プロムナード」になりうる。演者と聞き手がいれば音のプロムナードは成り立つ。場所を決め、その場所にいちばんふさわしい音楽を奏でもらえばいい。例えば哲学の道では静かにものを考えることのできる静かな音楽、場所に合わせて編曲や演奏方法を変える工夫があってもあってよい。また、子どもが集まってきたときにはそれにふさわしい曲を演奏する等、聞き手の状況に応じて変化させても一向に構わない。臨機応変に状況に合わせることも奏者にとって必要な素養だ。事前にプログラムを提示する演奏会と違うところだ。住宅街では、住民たちで話し合っ場所や音楽を決めていく。住民の中に適任者がいれば加わってもらってもよい。そうしていけば自然と「点」や「線」ができ、密度が濃くなり広がりを見せれば「面」になる。
- 今や大きな箱モノが次々とできる時代ではなく、むしろ既存の箱を含めた場所を使って何をするかというソフト面の創意・工夫が大切だ。それに最もふさわしい「箱」を既存の「箱」から選び出す。もちろんソフトの中にはロームシアター京都でしかできないという類のものもあるし、そこまでいかなくても一定の条件を必要とするソフトもある。また、プロムナードの象徴ないし顔になるソフトを作り出すことも必要だ。音楽祭は、箱モノで行われる有料の演奏会を含め、音楽のプロムナードと合わせ、出来る限り相乗効果が発揮できる仕組みを作ることが大切だ。オペラ等は、マスメディアと連携し、様々な形で多くの人に見てもらうことも大切だ。そのあたりは臨機応変に京都の文化発信力を高め、音楽のみやこ京都の魅力を存分に国内外に伝えられる仕組みを構築することも必要だ。

音楽における演奏家と聴衆（聴き手）

- 京都は人口 150 万人を抱える近代都市であると共に、世界に誇り得る数多くの歴史遺産や文化遺産が豊かな自然と調和して独特の風土を形成する日本の中でも稀有の大都市だ。清水の音羽の滝の水音と御室の奥の鳴滝の水音は異なり、嵯峨野の竹林を通り抜ける風の音はすぐそばにある亀山公園の松林の風音とは違う。川には水を好む野鳥の声、公園の樹や街路樹には小鳥、さらに郊外に行けばひばりのさえずりもきこえる。そんな自然と自然の音が色濃く残っている場所にも「プロムナード」をつくる。自然の音を「借景」ならぬ「借音」として活用し、少なくともその「邪魔にならない」ことを条件に演奏してもらおう。演奏する側は、その条件に合った曲を選ぶなり、演奏のしかたを工夫しなければならない。結果として演奏家の資質や能力が高められ、演奏家を育てることにもなる。
- 自分が散歩しながらそこで音を作り、また散策している人がその音をどういう態度で聴くかを感知しながら選曲し、曲想・演奏法を調整する。立ち止まって聴き入るのか、それともずっと通り過ぎていくか。それによってどういう演奏をしたらいいのかを考え、演奏家の感性も磨かれていく。「プロムナード」は聴き手とともに演奏家も育てる。他の場所についても同様で、京都御苑、清水の舞台、竜安寺の石庭、寺町通り、御池通り、嵯峨・野々宮の竹林、円山公園、亀山公園、市役所前広場等、条件は全て異なる。四条通の歩道が拡幅されれば、状況によってはそこも候補地になる。J R京都駅ビル大階段は、音のプロムナードの場所的象徴になり得る要素を持つもので、多くの課題はあるが独特の使い方ができる。いずれにせよ、それぞれの場所毎に違う条件があり、いかに上手く合わせられるかが重要なテーマになる。意外な組み合わせも期待され、試行錯誤を繰り返し適応力向上に努めることが大切だ。ときには、地元住民や聞き手が貴重な意見を出すこともあり得る。地域住民・聞き手の意見や苦情は「宝の山」になるはずだ。
- 京都という土地柄もあり、国内のみならず世界中から人が集まってくる。その中には、音楽に関心を寄せる人も少なくないはずで、このユニークな取組みを体感すれば、その人達がそれぞれ地元に戻り同様の活動を始めることもあると思う。そうなれば、京都から出発した「音楽プロムナード」の輪が内外に広がる。その結果、音楽プロムナード発祥のまち京都の評価が高まり、世界中から良い演奏家が京都に集まり、最高水準の演奏を聴きに耳の肥えた音楽愛好家も京都に集まるといふ、音楽の裾野を広げ、質を高めるための良い循環が生まれる。
- 私が 2 年間住んだミュンヘンには、世界の 10 本の指に入りうるオーケストラが 3 つある。1 つは州立歌劇場オーケストラ、あとはミュンヘンフィルとバイエルン放送交響楽団。どこも団員 200 人前後の大オーケストラだ。市民は聞きたいときにはいつでも安価で非常に質の高い演奏を聴け、耳も肥えている。高いお金を払ったのだから演奏の質とは関係なくアンコールを一曲でも多くとか、海外の演奏家に対しては、「おもてなしの心」でアンコールということにはならない。翌朝か週末の新聞紙面には厳しい評論が待ち受けて

いる。さらに地元の音楽大学には名だたる教授がいて…となると、やってくる演奏家は手を抜けなくなり、ある種の勝負をかけた演奏する。またそれが観客を魅了する…というようにいい方向に回っていく。日常生活の中に音楽がある環境、その環境に磨きをかけ、更により環境を作るという循環を構造的に生み出すことが大切だ。

市民参加型オペラ「永久の都・京都——京都の四季」の制作・内容・役割等

- ・次の提案は、京都をテーマにした「オペラ」作品だ。「音のプロムナード」のシーズン初めと終わりに毎回それを必ず演奏する、京都としてこだわりを持ち続ける「オペラ」作品を誰かに作ってもらう。例えば、オペラの曲名は「永久(とわ)の都・京都」、副題は「京都の四季」とする。縦軸を京都の歴史、横軸を京都の四季にした序曲と四幕から構成される本格的なものだ。
- ・演奏家が聴衆を育て、その聴衆がまた演奏家を育てるという構造をどう作っていくか。そのためには「プロムナード」構想の一つの重要な柱として、こだわり続ける 1 つの曲が必要だ。京響の総監督や指揮者は、着任すれば必ずこの曲と向き合い演奏する。当然、歴代の演奏と比べられる。「前の人の方が良かった」と思われたくないので、この曲だけは音楽家生命を懸けて演奏する。それは他の曲にも必ずいい影響を与える。「こだわり続ける曲」には、そのような意味と役割がある。ミュンヘン州立歌劇場であれば、ワグナーの「ニュールンベルクのマイスタージンガー」になるが、上演回数はもう 600 回を超す。幕間を入れると 5 時間に及ぶワグナーの楽劇を 1868 年の初演から約 150 年間にそれだけ上演してきた。その間、1963 年、第二次大戦で破壊されたバイエルン州立歌劇場再建のこけら落としの演目選ばれたのもこの楽劇で、それが名演中の名演とされる 573 回目の上演であった。ミュンヘンに関わりのある指揮者は必ずこの曲にぶつかる。聴衆も耳が肥えて「あの指揮者の演奏は……が良かった」などと批評する。地元の新聞社も専門家や聴衆の意見を聞いて舞台装置や演出等をも含め詳細に批評する。ますます指揮者や演奏者にプレッシャーがかかる構造だ。私も 1985 年に州立歌劇場でこの楽劇の上演に立ち会ったが、これまで幾度となく足を運んだ歌劇場は同じでも、それまで味わったことのない異様な雰囲気を感じた。演奏家と観客の真剣勝負、ある種の殺気さえ感じた。
- ・そういう仕組み、仕掛けが、京都の音楽水準を高め、真に音楽のまちにしていくために必要ではないか。オーケストラも演奏家も、京都でのアンコールの最後は「必ずこの曲」としてオペラの最後の部分を演奏し、市民がそれを聴いて評価の抛りどころにすることで循環を生む道具にできる。それだけでなく、その曲を多くの市民が愛唱歌にする。そういう音楽の「道具」が京都には必要だと思う。
- ・私のオペラ曲のイメージとして、はじめは、明治維新の折の官軍の丹波「山国隊」の鼓笛の調べがよい。時代祭の先頭に立つから市民にもなじみ深い。京都の歴史を考えると京都の近現代の幕開けで、多くの困難を抱えつつもそれを克服して今日の繁栄を築く分

岐点になったところが「永久の都」の冒頭にふさわしいのではないか。それをボレロのごとく、あのリズムをうまく使い京都の壮大な歴史絵巻を予感させつつ第一幕の幕開けにつなげる。初めは小さい音ではるか遠くにある感じ、その音が徐々に大きくなって近づいてきて音がぼったりやみ、一瞬の間をおいて幕が開く。それをこのオペラの序曲にしてはどうか。これは私の趣味的なイメージで、必ずしもこだわるわけではない。

- ・「永久の都」にはいろんな意味がある。政治の中心地であった時代は過ぎ、けれども今京都を音楽の中心にするという意味を表すのであれば、「音楽のみやこ憲章」を策定し、音楽振興を推進する。ミュンヘンは「ドイツの音楽の都」ということに反論は出ないし、市民はおおいに誇りに思っている。ウィーンは世界の音楽の都であることを誇っている。京都は首都という意味での都にはならないとしても、常に日本人にとっては「心の都」、世界の人々にとっては日本の古都であると共に「文化・芸術の都」であり、音楽をその象徴的存在にすることはできる。「心の都」・「文化・芸術の都」のおもてなしをするには、京都人の研ぎ澄まされた五感を上手くかみ合わせることが大切で、その点で普段あまり意識しない音をいかにうまく使うかは、非常に重要な課題である。
- ・従来、視覚・味覚・嗅覚に比べ、聴覚と触覚に関わる部分が手薄であったことは否めない。音楽を含め、おもてなしに活用できる様々な音を共通の財産として認識し、活用することも、おもてなしのすそ野を広げるとの視点から大切である。手立ては多様であるが、例えば、具体的な方法として京都検定の中にヒアリングテストなどを行うのも一つの方法であり、ややマンネリ化してきた京都検定にさらに上級の検定制度を設ける等の改革を行う際には検討してよい課題になろう。京都人に対しては、京都の音に対する関心を持たせるメリットが、現地で実際に音を聞かなければならないヒアリングテストには、他地域在住の検定試験受験希望者の足を京都に運ばせるメリットもある。その内に音と現場の映像を組み合わせたDVD等も出てこようが、それはそれで面白い。音楽プロムナードの射程を見定め、相乗効果のネットを張り巡らせ、京都の総合力強化の戦略を立てることも必要だ。
- ・山国隊の鼓笛の調べで流れをつくり、四季の初めの「春」は、都をどりの出だしの掛け声で始まる。そんなふうに京都の自然やさまざまな歴史的事柄、今ある文化をオペラの中に織り交ぜながら、最後はウィーンのニューイヤーコンサートや「プロムス」で慣例的に演奏される曲があるように、オペラだけでなく、京都で開催される音楽会の定番曲として頻繁に採りあげられる歌が「永久の都」の最後の部分にほしい。これを京都のあらゆる演奏会のアンコールの定番にし、京都市民の心や気持ちを繋ぐ象徴的存在にする。今も「京都市歌」はあるが、上品すぎるし、京都市民が誇りを持てるほどの歌にはなっていない。あと一つ、市民の誰もがその曲に誇りを持ち、その曲を口ずさむことにより心を鼓舞し、一緒に歌うことで一体感の持てる曲がほしい。オペラの最後の合唱曲にその役割を持たせるのである。長くない曲を何度か繰り返し歌える。つまり、演奏が終わった後、会場に集まった人を加え全員で歌える。そのような曲が必要だ。歌詩は、例え

ば「……………日本の歴史・文化の誉れ、日本人の心の都、永遠の都、幾多の困難を乗り越え今も輝き続け、私たちが愛してやまないまち京都」などというように（たまたま、12月14日の深夜から12月15日未明にかけてNHKBSプレミアムで120回目となる2014年のプロムス最終夜の録画放映をしていたが、何度見ても、最後を飾る定番の3曲、更に、聴衆をも巻き込んだ最後の一曲・エルガーの威風堂々に加え、英国国歌、蛍の光と続く盛り上がりには音楽の力のすごさを感じる）。

- ・さらに四季折々のさまざまなわらべ歌もオペラに必要な音だ。それを入れることで子どもたちがオペラに参加できる。子どもの晴れ姿を見るために親たちも見に来る。それを順にやっていけば、結構な数の市民が参加できる。他にも参加者を増やす仕掛けはいろいろと考えられるので、より多くの市民が参加できるものにする。音楽の本質に関わるものではないが、多くの市民を巻き込むことが成功の一つの重要な要素になることを忘れてはならない。それにより音楽コミュニティの裾野が広がり層も厚くなる。音楽を切り口に新たなコミュニティを形成し、それを地域コミュニティ、産業コミュニティ、街づくりコミュニティに展開させることが出来れば構想の最終目的に資する。衰退し、機能不全に陥っている地域コミュニティの復興「コミュニティ・ルネッサンス」これこそが、現在の地方政治家が取り組まなければならない最重要課題の一つだ。
- ・衣装はともかく、大道具、小道具を全て揃えるには費用がかかるので、ある程度は映像でよい。それこそ、映画（映像）のまち京都ならではの新しいスタイルのオペラがあってもよい。昔は映像技術が進んでいなかったもので、なんでも実際に作るか、絵にする必要があったが、今の映像技術ならかなりのことができ、コスト低減策にもなる。実際、世界的に見ても、その手法は当然のごとく用いられてきている。京都にあった技術、京都の伝統産業、京都に生まれつつある新しい技術等を戦略的に上手く結び付けることが、人を結び付けるのと同様にオペラの大切な役割になる。京都は伝統を承継するだけでなく、新たな時代の息吹を敏感に感じ取り、それをいち早く吸収し生活や経済活動に生かしてきた。オペラも、そのような京都の気風を十分に反映し、歴史と未来、伝統と革新、伝統産業と先端技術、それらをうまく融合することが大切だ。
- ・南ドイツのアルプスの麓に木工芸品を中心に手工芸品製作と観光を主要な産業にする人口わずか数千人のオーバーアマガウという村がある。この村を世界的に有名にしているのが10年毎に開かれる「キリスト受難劇」で、その年には世界中から数十万人の観客が訪れ、村は観光客であふれかえる。村民総がかりで行われるこの大イベントは、受難劇に出演する人だけでなく、大道具、小道具は言うに及ばず、受難劇を行う劇場まで自前で作り上げるなど、全村民が何らかの形で村の一大事業に参加し、それ自体が非常に大きな産業になっている。1634年に始まったキリスト受難劇は、今では村最大の財産になっている。1984年の350年記念公演観劇の際にそのことを強く感じた。京都の経済規模を考慮すると、オーバーアマガウは比較にならないが、オペラには多かれ少なかれそのような要素がある。また、総合芸術の色彩の濃いオペラには、非常に幅広い分野との関

連性があり、それを何に、また、どのように活用するかは、それを考える人の力量によってきまる。それらを考慮すると、衣装、大道具、小道具の製作にも最善を尽くし、京都の伝統産業の精華を結集させる必要がある。100年、200年、500年と時が移れば、それらの中から重要文化財や国宝に指定されるものが出てきても不思議はないとの意欲を見せる必要がある。将来的には、音楽プロムナードの歴史を示し、歴代出演者に関わる資料等を含む資料、衣装、大小道具等の展示スペースを設けることも視野に入れてよい。個別のオペラ上演の映像も利用価値は低くない。

- 更に、歌舞伎の口上や、鞍馬の火祭など祭りや神事の初めの合図等も京の四季に結び付く。京都ならではの千年の文化があってこそという音がたくさんある。さらに京都には、仏教関連で雲水の修行にまつわる音とか、「冬」の大晦日の除夜の鐘の音は絶対入れたい。高音のいい音色の妙心寺の鐘、低音で腹に響く知恩院の鐘の音など取り入れたい音は多い。要は、世界から京都に来て、オペラを見る人にとって、京都の歴史・文化・生活のエッセンス、京都の美術工芸や伝統産業の精華を堪能できる内容にしなければならないということだ。そのようなオペラを作るのは並大抵のことでないが、オーバーアマガウの例を持ち出すまでもなく、年月を刻み、10年、50年、100年と、時の経過とともに京都の重要な財産として光り輝く存在になるはずであり、また、そのようにしなければならない。いずれにせよ、音という切り口からそこに京都のエッセンスが盛り込まれるオペラができ、市民の多くが何らかの形でそれに参加できれば非常に魅力的なものになるとの期待が持てる。音楽祭という視点からプロムナードを見ると、このオペラは非常に重要な役割を果たすと共に、京都全体の音楽力向上という視点でも、有効な道具になり得るものである。
- オペラ「永久の都・京都」の作曲を誰に委託したらいいかは何とも言えない。「この曲はこの人が作曲した」と言われて皆が分かる人もよいが、この曲を作ったから有名になる人でもよい。長い目で見れば、後者の方が良い。やりたい人は多いだろうが、京都の風土、歴史、文化芸術、人々の営みをよく知った上、自然や生活の音、宗教に関わる音など京都の音、更には音楽、特にオペラに強い関心を寄せ、オペラの脚本作り、オペラ全体の総合的な監督のできる人、それをサポートする個人や組織の協力も非常に重要である。行政が関わると「この花街の音を取り上げたらあちらも…」というように、すべて横並びにしてしまうのでよくない。脚本家、作曲家、総監督は、視野の広い人、人の意見によく耳を傾ける人、一旦こうと決めたことは信念を持ってそれを推し進める人がよい。現状からすると、初演の総監督兼指揮者になることを前提に、現在の京都市との関係では小澤征爾氏、京都市出身で京都にこだわりを持っている点では佐渡裕氏が有力候補であり、そのどちらかの意見を聞くのも一つの方法である。
- どちらについてもサポート体制が非常に重要になるので、京都に基盤を置くシンクタンク・総合コンサルタント組織を中心にした構想推進の中核組織を構築する必要がある。その事務局的作用を果たす組織として、例えば、(株)CDI等を挙げることができる。

また、その外郭に、中核組織と市民の仲立ちになり、個々のプロムナードの計画を立て、計画実施に向けて様々な活動をする実行委員会的組織も必要だ。門川市長が進めている100人委員会は、音楽プロムナード構想の推進についても役に立つ仕組みで、音楽プロムナード推進100人委員会を立ち上げるのも一つの方法だ。この組織は、人的構成を変えることは当然視野に入れられるべきであるが、音楽プロムナードが存続する限り継続させるべき組織である。今後の市政推進には、何事につけ、そのような仕組みが自然で有効な方法でないか。

- ・イタリア・ヴェローナの古代ローマ遺跡で行われる野外オペラに行ったことがある。幕間にはジェラート、飲料、軽食売りの掛け声が聞こえ、そこをねぐらにしている野良猫が舞台を横切ったりもする。「アイダ」の最中に、遙か上空を飛ぶジェット機の音が聞こえもした。普段ホールで聴くのと趣が違って逆に面白いとさえ思った。夜9時ごろから始まり、終わりはない。アリアが終わって観客が拍手喝采すれば、歌手は「乗って」アンコールに応えるなど、劇場の場合と異なり時間はその時の雰囲気によりかなり幅がある。終われば夜食、オペラの宴の余韻を楽しむアルコール等で周辺の飲食店にはぎわう。いずれにしても、日本と違い、みんな気楽に音楽を聴いている。日本では特にクラシック音楽の場合には、かしこまって聴く聴き方のみが伝わり定着してしまったが、ヨーロッパの人たちの聴き方は一様ではない。咳払いもこらえて狭い椅子にすわってじっと音楽を聴くという形も大切だが、個人の好みによって音楽への関わり方を変えられ気楽に音楽に入っていけるなど、音楽プロムナードには、これまでの日本のクラシック音楽をはじめとする多くの音楽鑑賞になかった音楽の楽しみ方ができる非常に大きな長所がある。音楽には多様な入り口があり、多様な楽しみ方があることをよく理解して、プロムナード計画を推進することも肝要だ。自分流の楽しみ方ができるのも、プロムナードの良いところだ。

プロムナードで気楽に音楽を聴く

- ・京都には「プロムナード」にもってこいの道や場所がたくさんある。京都に来れば、例えば子どもの集まりやすい岡崎公園では子どもの好きそうな音楽が流れている「子どものプロムナード」、シャンソンやクラシックといったジャンルごとのプロムナードを体験することもできる。観光客の多い場所では、曲を含め京都らしさを演出する「おもてなし的な御趣向」があつてよいかもしれない。それで物足りないリピーターに対しては、別の対応の仕方もある。場合によっては、音楽以外の分野とのコラボがあつてもよい。住民の中には「プロムナード」に反対する人もいるだろうが、意見を言う人は却つてやりやすい。反対の理由を一つ一つつぶしていけばよいからだ。その上で、良いところを出せば、その人は賛成にまわる。条件の整う場所から始めれば、他の候補地の住民にそれを見聞きしてもらえば、理解する人が増えて行くだろう。無理は禁物、京都百年の大計を実現するには時間と忍耐が必要だ。
- ・数年前だが、ミュンヘンのオデオンスプラッツで第九のリハーサルをしていたのには驚

いた。早速ホテルでチケットの手配をしてもらった。時にはそういう仕掛けがあっても良いと思う。場所はどうしても限定されるが、場所の特長を生かして無理のないようにしないとイケない。この構想に反対する人は、逆に音楽を理解してもらう良い機会、ピンチをチャンスに変える機会と捉えるべきだ。「音は出すが、音楽の音は心地よい音で、しかも住宅地に配慮してジャンルや選曲、時間帯などは住民との話し合いで決める」などと説得する。京都で1~2キロ歩けばそういう場所にたどりつくというくらいになれば成功だ。世界にそこまでできているところはない。ウィーンでもだいたい街の中心地の一部、歩行者天国のところだけだ。ミュンヘンも似たり寄ったりで、市庁舎前広場とそこからカギガタに延びる歩行者天国だけだ。日本では銀座通りの日祝日限定の歩行者天国が有名であるが、音楽的要素は皆無に近い。京都に音楽プロムナードを作り、そこで演奏する演奏者、それを聴く聴衆の双方が自分の流儀で音楽を楽しめる仕組みが出来れば、音楽愛好家の裾野を広げ、音楽を切り口に様々なコミュニティを形成し、それがさらに新たなコミュニティを構築する起爆剤にすることもできる。「一隅を照らす。これすなわち国宝なり。」という最澄の言葉は、まさにそのような状況を視野に入れたものである。

- ・人が移動することによって、音が大きくなったり小さくなったりするのが「プロムナード」の面白さで、間の置き方に聞き手が加わるところが演奏会場の椅子に座って聞くタイプの音楽鑑賞とは異なる。景色が変わり、音も変われば「借音」と「借景」が相乗効果を発揮し、会場音楽では味わうことのできない音楽の楽しみ方ができる。音楽の多様な楽しみについては、千田日記こと高山俊照氏の3冊のレコード紹介コラム「他人に押しつけるわがまま」、「元気と幸せのおすそわけ」、「この曲が弾きたくて」は示唆に富む。

さまざまな音に対する感性を磨く

- ・京都文化を「音」という観点から見直すとさまざまな再発見もある。先ほど自然の音について述べたが、人の営みから出る音もある。例えば、お茶の世界にも音がずいぶんある。特有の合図だとか、茶釜でお湯の煮立つ音、炭をおこす音、燃える音などは、お茶室が静寂な場所ゆえに意味のある大切な音だ。祇園に行けば舞妓さんの「ぼっくり・おこぼ」の、遠くからだんだん近くに聞こえてくる音とか、着物で畳の上を歩くときの絹づれの音とか、そういう人の営みの中から出てくるささやかな、しかし独特の音。そういう雰囲気や趣を感じられるのは日本広しといえども京都以上の場所はない。それが京都人の音の感性を磨いてきたともいえる。多くの京都人が既に音楽に対して独特の方法で身につけてきた感性を持っている。音楽の基盤をさらに強固にし、また、それを広げるには、さらにその感性を磨くことも大切だ。自然の音、生活の音、宗教儀式や修行、祭り、茶会などの音も、音の感性を磨くための重要な道具になる。その延長線上に音楽や舞台芸術に関わる音があり、それぞれには共通の要素が少なくない。
- ・一方「音があること」とともに「音がないこと」も大切だと思う。まさに音楽は音があることと音がないことの組み合わせ、音の高低、強弱、長短の組み合わせにより成り立

っている。日本画の特徴は、線と余白を活かし、画面を完全には塗りつぶさないところにある。音楽に直せば「間」があるということになる。それは仏教で言えば「無」と「悟り」になる。余分なもの全てを除きそこで何が残るかは、何事につけ非常に大切だ。日本人はそれを大切にする。残すものを更に生かすために余白を大切にする。絵画、彫刻、音楽、舞台芸術等、何事につけそれが大切だ。音楽では、それを音の間隔、長短、強弱により示す。小澤征爾さんの指揮は、演奏を一瞬「ふっ」と遅らせるという演奏方法をよく用いる。ほんの微妙な一呼吸であるが、それにより曲そのものの感じが随分変わる。これなども日本人、特に京都人の感性である「間」、音楽でいえば音の空白、宗教や哲学でいえば「無」に通じるところがあるかもしれない。ここに何を入れるか、或いはなにも入れないか、そこまで行くと事は音楽だけにとどまらなくなる。

- 能楽の世阿弥は、特に舞台に登場する間合い、能を演じ始める一瞬が非常に大切で、その日の演能の成功・不成功の重要なカギを握ると言う。例えば、コンサートなら開演のベルが鳴って観客がシーンと静まり返り、舞台の袖から指揮者が歩いて出てくる靴の音が聞こえ、舞台の中央に近づいたところで観客は拍手を送る。指揮者が指揮台に上り観客がかたずをのむ。観客の呼吸や心臓の鼓動を背中で読み、観客が「もう…」と思ったその瞬間をとらえて指揮棒を振る。それが世阿弥の言う「間」であり、間は出だしだけでなく、音楽全体の演奏を組み立てる非常に重要な要素になる。この「間」に関して、音楽プロムナードは、聞き手が自分にあった「間」を作り出すことが可能であり、苦痛になるような演奏の押し付けはない。気楽に音楽と接することができる大きな要因になる。私は書齋でよく音楽を聴くが、多くは原稿を書く前の神経を集中させるためであり、目的を達したところで聴くのを止める。それも音楽の楽しみ方、使い方で、作曲家や演奏家には申し訳ない気もするが、音楽プロムナードも、演奏家と他の聞き手の邪魔にならない限りどのように使ってもよい。使い勝手のよさこそが最大の特徴であり、音楽愛好者数を増やす大きな要因になるはずである。

鴨川河川敷「音の楽市楽座」

- 日本人一般の「プロムナード」という言葉に対するイメージが新鮮でないとすれば、いろいろ言葉を作ることができる。例えば「プロムス」のような言葉を作ればいいわけで、それはさほど大きな問題ではない。「プロムス」という造語の意味を知らない人は「何だろう」と思うわけで、それはそれでいい。ニュースか何かでそれを知っている日本人の多くは、プロムス最終夜のことしか知らないと思う。
- 「プロムナード」は、公園や道路など場所によっては様々な法律や条例の制約を受けるかもしれないが、それらは人が作ったものだから、人がどうにかできないわけがない。歴史的にも、現在の地理的条件を考慮しても、鴨川の河川敷は非常に重要な音楽プロムナードの場所である。河川敷の左岸は、音楽や演劇などに使う。右岸は夏には川床が設けられる飲食店があるので音の出るものは好まれないだろう。特に、京都らしい雰囲気売りをする座敷を持つ日本料理店などでは、洋楽の多くはマイナスになり、「借音」にな

らずに「雑音」になる。

- このような場所では、音楽プロムナードは、基本的には音のない「音の楽市楽座」のようなものに変える。音楽に関わるCDやレコード、楽器、楽譜など、個人がいなくなったものをフリーマーケット的に交換する。京都に眠っているさまざまな音楽に関わるモノを発掘し、流通させることにより、有効活用の道を開き、音楽に興味を持たせファンを増やし、また演奏に入っていく人を増やすといったことに役立つかも知れない。音楽に関わりのある様々なものを上手く噛み合わせて相乗効果を生むように工夫することで、その場所をより魅力的なものにすることも大切だ。何より鴨川の河川敷は歌舞伎という伝統芸能発祥の地と言われており、音楽・舞台芸術にふさわしい場所である。京都には、他にも音楽や舞台芸術の聖地はあるはずだ。

重要な役割を果たす音楽NPO

- 先ほど少し触れたが、「プロムナード」づくりやその運営には、演奏家や音楽愛好家をベースにしたNPO法人をできるだけ多く作る必要がある。音楽分野はまだ比較的少ないが、個人ベースになると信用の有無等が問題になるので、NPOをベースに活動するのが望ましい。要は公益性をうまく引き出すことで、市の音楽文化関連の施策をサポートしたり、子どもの情操教育をサポートしたりすることが、音楽をベースに公益性を持たせることになる。公益性を含め、NPO法人の条件を整えることはそれほど難しいことではない。どう作り出し、どう相互の連携を保っていくかが「点を線、線を面にする」場面では大切になる。特に聴き手の市民を育成するという場面では重要な役割を果たす。
- 京都市には国の基本法に基づいて京都文化芸術都市創生条例があるが、さらに音楽に特化した条例を作っても良いと思う。国に上位の音楽文化振興法があるので、それを受けて新たに条例を作ることができる。今ある条例を持ち上げて「基本条例」にする形がスムーズではないか。そうすれば、今の条例づくりに尽力した人たちの気分を悪くすることはないと思う。
- 京都を今後、音楽を一つの切り口に活性化、その分野の「都」にすることに協力したい。昨年提案された構想の仕掛けをどうするか、2年目の今年はもう少し具体化したほうが良いと思った。具体化すれば議論がしやすくなり、ことは前進する。私の提案がそのたたき台になれば、事の成否はともかくそれだけで意味がある。